新聞記事 育む思い

「第2回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内93校から1089点の作品が寄せられ、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は10日、福島市の福島民友新聞社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。

コンクールは、小学校では今年度から実施、中学校では12年度から実施される新学習指導要領に「新聞活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身につけてもらう目的で実施している。

「新聞記事を読んでの感想」をテーマに、5月から8月末までに福島民友新聞をはじめ一般紙に掲載された記事や社説、コラム、連載企画を読んで感動したこと、ためになったこと、興味を持ったことなどの感想文を募集した。今回は、東日本大震災や原発事故関連の記事を読んで、自ら体験したこと、感じたことを踏まえての作品が多かった。

審査委員長を務めた福島地区小学校教育研究会国語部長の二瓶篤子佐倉小校長ら審査員が審査し、入賞作品を選んだ。（作品は原文のまま）

審査長＝二瓶篤子（佐倉小校長）▽副審査長＝佐藤和彦（平野中校長）▽審査員＝佐藤丁弐（福島三中教諭）笠間祐平（清水中教諭）菅野順子（北信中教諭）津田由香里（佐倉小教諭）清野喜代志（福島一小教諭）国馬光夫（福島三小教諭）高沢里美（瀬上小教諭）冨田貴俊（永保小教諭）菅野信（松川小教諭）

◆最優秀賞（中学生の部）
「私達の心の叫び」
桜の聖母学院中1年　八城（やしろ）　美和（みわ）さん

今回の原発事故に伴い、計画的避難区域に指定された飯舘村の住民説明会の記事を見て、私は、今私達が置かれている状況を、改めて考えさせられました。

飯舘村の高校一年生の渡辺奈央さんの言葉が、私の心の奥深くにあった大きな不安を、はっきりと分からせてくれました。

「私が将来結婚したとき、子どもが産めなくなったとき補償してくれるのですか。」

この言葉は、私の心に重くのしかかりました。私達が被爆していること、考えないように、考えないようにしてきたことを、見事にはっきりと言い当てられたような気がしました。三月十一日以来、何かと不自由な生活を強いられながら、少しでも被爆しないように気をつけながら生活をしていましたが、いつも心の中に何か自分でもわからない不安があったのが、この渡辺奈央さんが言った、このことだったのだと思いました。

渡辺さんの中学時代の友人たちは、震災後、北海道や栃木へ避難し、離れ離れになったそうです。東電に自分たちの声が届いていないと聞き、友達の考えたということの言葉は、正に私達、福島県に住む女の子達の心の中を代弁してくれたと思いました。

「とても重い質問。影響が出ないようにしたい。」

東電の敲副社長の答えに、対応の遅れを指摘した渡辺さん。私達は、あの時あのように、正におけば良かったのに、どうして避難しなかったのだろう、大人になった時に、後悔するのでしょうか。この重い質問は、私達が、これから一生背負うかもしれない大きな問題なのです。今、誰にも答えは分かりません。ただ、一日でも、一分でも早い原発事故の終息を願うだけです。

渡辺さんの他にも、作付け制限をされた農家の人、酪農を辞める決心をした酪農家の人、厳しい意見がたくさん出ていました。どの人も、今までの日常は無くなり、これから、いつまで続くのか分からない避難生活に入るのです。目に見えない放射能が、これ程までに私達を脅かしているのです。自分達の将来が見えないことへの不安、情報が伝わらないことへの怒り、たくさんの気持ちが混ざっています。答えの出ない未来を、私達はどのように考えたらいいのでしょうか。

たくさんの人の前で、自分の考えをはっきりと言ってくれた渡辺さんのおかげで、今の自分の不安としっかり向き合う勇気をもらいました。不安が無くなる訳ではないけれど、この先いつまで続くか分からない放射能と、うまく付き合っていくことを、考えていこうと思うようになりました。私は、福島県が大好きです。この福島県で子供を産み、育てられる日が来ることを、心より祈ります。

◆優秀賞（中学生の部）
「放射能を理解する」
福島四中3年　本田（ほんだ）　一紗（かずさ）さん

三月の原発事故以来、私たちがずっと悩まされている放射能汚染。放射線の影響が次第に明らかにされる中、福島高校のスーパーサイエンス部が線量の測定を行いました。

福島高校は、私の通う福島第四中学校の目の前で、通学路にあるだけでなく、志望校でもあるので、よりなじみのある学校です。だからこの記事にはとても興味を持ちました。

行政から与えられたデータだけに頼らず、今までの学習を生かして身近な場所の線量を測り、自ら危険回避しようとする姿勢は評価されるべきだと思います。

また、実際自分たちで測ることで、線量の高い場所がわかるだけでなく、その場所を避けようとする意識が今まで以上に高まるのではないでしょうか。

一方で、なぜ高校生が線量を測らなければならないのか、という疑問を抱きました。

成長期の私たちは、放射線に対する感受性が強く被曝した場合、発ガン率が上がったり、病気にかかりやすくなったりします。放射線を測定するということは、その危険性をさらに高めるということであり、子供のやるべきことではないはずです。将来への不安はなかったのか、周りの大人は止めなかったのか、と思ってしまいました。

しかし、学校は一日の中でも長い時間活動する場所です。その学校の線量のデータがなかった一箇所、どこでどのように測ったかもわからない、となれば、自分たちで測らなければ、という思いが生まれるのも当然なのかもしれません。

それと同時に、もっと明確なデータがほしい、自分たちで測らなければ安心できない、と高校生に感じさせた政府や県、市に不安感と怒りを覚えました。

本来なら国がやるべき測定も十分にせず、諸外国から危険だと指摘されても「安全だ。」と言い続けるなど、事故が起きてからずっと、国民のことを本当に大切に思っているのか、と感じていました。

高校生が、放射線の危険も顧みず測定に踏み切ったのには、政府のそのような怠慢が、少なからず影響していると思います。

今回の事故は、何十年にも渡って被害が出る、甚大な事故です。風評被害、健康被害を始めとした、福島だけでなく、日本全体が背負う課題が山積みです。そしてその課題に向き合い、解決していくのは、私たちしかいません。そのためにも、高校生のように、自ら率先して動くだけでなく、過去の原発事故なども踏まえ、放射線についてもっと知らなくてはならないのだと思います。

この記事を読んだのを機に、私も率先して情報を集め、将来に役立てられるようにしたいです。

◆最優秀賞（中学生の部）
「原発・避難・解除」
篠楽中1年　武内（たけうち）　優（ゆう）君

「避難準備区域来月上旬にも解除」という新聞記事を目にしたのは、八月十日だった。明日であの震災から五カ月という日だった。

ぼくの家は大熊町にあり、原発から三・一キロ程の所にある。三月十一日、あの日、僕は学校で地震を経験し、先生の車で町のスポーツセンター（体育館）に避難した。次の日の朝には、母の車で都路の古道小学校の体育館、田村の春山小学校と、避難場所を点々とした。栃木県の祖父母の家にも、二週間程お世話になった。そして四月には、ぼくの中学入学のことや、両親の仕事のことも考え、福島市内に家を借り、今の生活がはじまった。

あれから五カ月、国は準備区域解除という方針を示した。解除イコールすぐに帰れると思っていたが、新聞を読むとそうではないことがわかった。モニタリングをし、除染などの復旧計画の策定をし、完了してやっと準備区域が解除になるのだ。先の長い話のように感じた。

解除になることは、住民にとってうれしいことなのに、ぼく自身考えてしまう。家には帰りたい。でも不安も多い。ぼくだけ帰っても、友だちが帰ってこなかったら…。店や病院はどうなるのか。地震でこわれたあの道路はなおるのか。水道やガスは…。

新聞には、避難住民のコメントがあり、「地域が元に戻るには学校の再開が欠かせない。」と書かれていた。しかし、今、ぼくの住んでいる福島市からも、避難し転校していく人がいるのに、本当に子どもが帰っていくのだろうか。

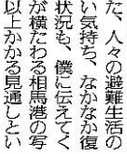
「子どものいない所に、学校の再開はありえない。」教師をしているぼくの父は、さびしそうにつぶやいていた。

「働く場所」も、地域も元にもどるための大切な条件だ。働く場所がなくては、生活はできない。同じように、農家の人たちも、売れるかどうかわからない作物を作っても、生活はできないだろう。

帰えるということは、元通りの生活ができるということだ。学校も、友だちも、近所の人たちも、元通りになることだ。でも「解除」という言葉が一人歩きし、それを喜んだり、不安に思ったりする人がいる。同じ情報をえても、一人一人受け取り方がちがうということを、この記事を読んで感じた。

報道とは、正しい情報を発信することだ

◆優秀賞（中学生の部）
「明日を切り開くために」
原町二中3年　宮原（みやはら）　理為智（りたち）君



「放射線量」、「除染」、「セシウム」。大震災の後、これまで見たこともない言葉を新聞やテレビで毎日のように見るようになった。また、原発の影響で三月以降福島県から避難する人が増え、たくさんの人々の生活は大きく変わっていった。僕自身も、住んでいる所が緊急時避難準備区域のため、両親と離れて弟達や祖父母と一緒に埼玉の叔父の家に行っていた時期があった。避難していても、福島はどうなっているのか、帰れるのはいつなのか、学校は、友達は…、と気になることがたくさんあった。

その情報が欲しくて、いつもより新聞を丁寧に読んだり、ニュースを見たりした。

さらに、僕は中学三年生であり、進路の事などを考えると、これからどうすればよいのかという悩みもあった。「無理に原町に帰らないで、埼玉の高校に行けばいい。」と友達やおじさん達は言ってくれた。親切な言葉がとてもありがたいと思ったし、体のことを考えると目に見えない放射性物質は正直不安でもあった。

しかし、そんな僕が「原町に帰ろう」と強く思うようになったのは、新聞のおかげだった。仕事の関係で原町に残っている両親が持ってきてくれる福島の新聞には、復興しようとがんばっている地元の人々の話、原発の様子、放射線量などの詳しい数値が載っていた。また、人々の避難生活の様子や震災後のつらい気持ち、なかなか復興が進まない大変な状況も、僕に伝えてくれた。中でも、漁船が横たわる相馬港の写真、鉄道復旧は五年以上かかる見通しという記事、サテライト校の現状を伝える論説は、原町に戻ってもこれまでの生活と決して同じではないことを教えてくれた。しかし、一方で、ハンデを持ちながらも部活動や勉強に励む高校の先輩達の記事に、僕は励まされ、勇気をもらった。

僕は原町が好きだ。生まれ育ったこの町ずっと暮らしていきたいし、そのためにもこの町をもっと良くしていきたい。将来この町のために僕が何かできることはないかと考えるなら、今の原町の現状をしっかりと目に焼き付けておかなければならない、と記事を読むうちに考えるようにもなった。

新聞は、迷っている僕の背中を押してくれた。もし、新聞を読まなかったら、僕は今も埼玉で悩んでいただろう。今起きている事実をしっかり見つめること。いろんな人の意見を参考にするのはいいが、どうしたらいいのかは自分の頭で考えること。大震災の後の新聞を通して僕は学んだように思う。原町に戻ったこれからが大変になると思うが、「大震災を言い訳にしない」「厳しい環境だから学べることがある」という言葉をかみしめながら、自分の道を決めていこうと思う。

新聞への親しみに好感

福島民友新聞創刊一一五周年を記念して昨年発足した「みんゆう新聞感想文コンクール」が、今年は第2回を迎えました。

今回寄せられた記事は東日本大震災に関するものがその多くを占めました。

新聞感想文からは、記事を読んで抱いた感動、希望、夢、怒り、決意などさまざまな思いが伝わってきました。

特に小学3・4年生部門では子どもらしい感受性で記事を受け止め、自分自身の生活に照らし合わせながら素直に感想を書いていて好感がもてました。また、小学5・6年生部門になると主張と文章構成がしっかりとしており、筋道の通った文章が目立ちました。いくつかの記事を重ね合わせて読んだり比べて読んだりする文章も多く見られました。さらに、中学生部門では、時に批判的な思考も交えながら思いを広げたり深めたりするとともに、自分の物の見方や考え方、生き方にまで反映するなど深い洞察力に感心しました。入賞作品はどれも借り物の言葉ではなく自分の心の中から出た言葉でつづられており、それだけに言葉の力が感じられました。

また、感想文からは、書き手が新聞をよむ習慣が身に付いていて、そこから新聞記事を仲立ちに家族の会話が広がっていることもうかがえました。

新学習指導要領の下、小中学校の国語科で新聞を活用した言語活動が位置づけられたことをはじめ、学校現場での新聞活用は広がり続けています。そのような中、新聞に親しむ姿は実に好ましい傾向です。

震災と原発事故以来、情報そのものが問われた事実がありました。新聞は時代を映す鏡です。新聞を通して子どもたちが現実と向き合いながら健全に育つことを願ってやみません。

新聞は知識の宝庫であるばかりでなく、主体的に課題解決するための思考力、判断力、表現力を培う媒体でもあります。

広い視野と豊かな心を養うことを目的にスタートしたこのコンクールのますますの発展を祈念します。

審査委員長講評
福島地区小学校教育研究会
国語部長
二瓶　篤子（佐倉小校長）

第2回　みんゆう新聞感想文コンクール　最優秀・優秀作品